無名と非命　福地復一のこと

森　仁史

天香福地復一〔図1〕は明治二十九年に西洋画科とともに新設された東京美術学校図案科の初代科長であったが、そのことよりも岡倉覚三が美校を追放され十七名もの追随者が続いた明治三十一年の学校騒動の起点となった怪文書の主として語られることの多い人物である。岡倉の忠実な弟子であった齋藤隆三は「用いらるるの厚きに慣れて埒を越え、驕慢専横の行動さえ多く」と断じている。齋藤によれば、二十七年の岡倉の中国旅行中に福地と橋本雅邦が対立し、雅邦から訴えられた岡倉は福地を京都に追おうとした。福地はこれを怨んで「天心排斥を策謀」したという。だとすると、対立とその遺恨が生じてから二年後の図案科設置時点に、岡倉は福地追放を考えていたはずなのに主任就任を許してしまったことになり、事実にそぐわない。しかも、齋藤は「読売新聞」紙上に現れた築地警世会なる怪文書の筆者を福地・松岡壽・長沼守敬だと記事を鵜呑みにして記述している。これは新聞紙上での噂以上の信憑性をおくことはできないはずだが、今も通説として流布している。福地はこの騒動の後、十年余で没してしまい専門の図案界でも急速にその名を忘れ去られることになった。他方、岡倉は野にあって日本美術院を創設し、〈日本画〉の興隆に貢献しその足跡を今に至るも語られ、人々の記憶に留まることになる。この交錯は両者のその後の対照的な命運を導いたように筆者には思えるのだ。一方は無名の開拓者として、他方は非命の殉教者として。

福地は伊勢宇治山田町の生まれだが、特別な家系の出自ではなかったようである。明治九年に津師範学校に入り、翌年小学訓導となっている。十五年まで三重県内を山田町、北牟婁郡を転々としている。十八年に上京し、三田英学校で英語を学び、十九年には教育出版所普及舎なる出版社で編集に従事した。いずれも修学は短期で、口に糊することに追われているように見える。

福地が中央で、また美術に関わることになった最初の仕事は明治二十二年四月に伊勢神宮神苑会から「歴史博物館設計ノ取調」を委嘱されたことであった。同会は花房義質を会長とし、伊勢神宮に日本の歴史を展示する施設をつくろうとしたのであった。「徴古舘設立趣意書」と題された目論見書が手元にある。本文図版とも木版刷りで、展示状況も一通り把握することができる程度の精度で描かれている〔図2〕。図版を一見すれば、内国勧業博覧会で始められた展示スタイルを再現しようとしていることが見て取れる。実際にはこうした復古調の施設は実現せず、工科大学卒業の片山東熊設計になるルネサンス様式の神宮徴古舘（明治四十二年）〔図3〕が建てられることになるのだが、福地がこうした展示手法に長じており、彼の実務家的な手腕が買われたのかもしれない。そういえば、福地の辞任後という微妙な時期に図案科長に就任したのは塩田眞であったが、彼も美術学校に移る直前は農商務省商品陳列舘の初代舘長であったし、美校辞任後の明治三十七年に清国へ渡航し、直隷省考工署（袁世凱設計という）芸長という舘長兼展示主任のような仕事をしており、中国では専ら展示指導をして翌年帰国している。両者とも言説も得手な開拓者であり、実務家であったといえるだろう。展示は概念を他者に伝える作業であるが、これはデザインの根本義と通底することでもある。

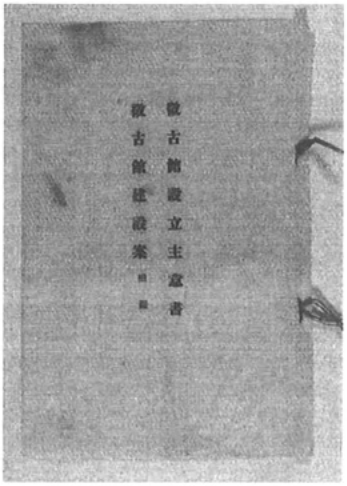
ともあれ、この二十二年八月三日から福地は帝国博物舘歴史部と美術部に隔日勤務するようになる。十二月からは常勤となり、二十五年からは臨時全国宝物取調局に監査掛として関わり、関西各地を調査する。この間、二十一年に福地は『美術年契』を金港堂書店から出版している。これは同年に岡倉が博物館から承認を得た「美術歴史ヲ編纂発行」する構想に包含されるはずの美術年表の原型であろう。美術を絵画・彫刻・建築園芸・漆工・陶工・織工からなると規定してはいるものの、帝紀による時代区分や

版木による記述や枠の取り方などはまったく近世的であった。それは福地の学んだ学問体系の反映であったろう。しかし、近代日本美術史上の最初の年表であり、明治を同時代として記述したことには大きな意義があるはずだ。この後、三十年に福地は美術歴史編纂副主任となり、岡倉なき後は主任として執筆を続け、三十二年に「稿本日本帝国美術略史」を完成させた（この顛末については『近代画説』十号の拙稿をご参照ありたい）。

そして、明治二十七年十一月には東京美術学校教授となる。当初彼が担当したのは「東洋美術史」であった。また、この年に帝国図案社を設立している。福地は三十年三月二十六日にパリ万博への派遣が決まり、翌年十月までヨーロッパに滞在する。三十一年三月十七日に岡倉は博物館を追われ、翌日と二十一日に「読売新聞」に暴露記事が現れる。二十六日岡倉は美術学校をも辞し、二十九日に雅邦以下十七名が続いたが、書類上は「懲戒免官」であった。そして、滞欧中の福地は四月六日付で辞表を提出している。事由は「自己ノ都合」であった。今は東京芸大図書館に天香遺物と称される手描きの図案資料が僅かに彼の足跡を留めるばかりである。

福地は初めての渡欧により「西欧古今の美術を視、聊か感ずる所」があったようで『日本帝国美術略史』の改訂を志したが、博物館では三十五年に今泉雄作を中心に改訂版の準備を始め、紆余曲折を経て明治四十一年の再版に至ったが、ここに福地は執筆の機会が得られなかった。また、同時にアールヌーボーの洗礼を受けつつも、日本美術が「著想の瑰奇にして意匠の富贍なる、古今よく匹儔し得るものなし」と自信を深めたようであり、新しい図案創作に意欲を燃やした。三十四年に日本図案会（会長大隈重信、幹事長和田垣謙三）を創設し、翌年五月には上野公園五号館で最初の展覧会を開いた。その後も、福地は古社寺保存会や地方産品の改善指導に携わり、三十七年にはセントルイス博覧会審査員となり茶・醤油の出品組合の出品指導を監督し、四月に渡米した。このため日本図案会の活動は一時中断したが、三十八年頃から再開した。しかし、世紀末芸術の担い手はもっと若い画家か東京工業学校工業図案科（平山英三、井手馬太郎ら）を卒業したデザイナーに移りつつあった。図案会の例月審査の顔ぶれは旧龍池会や明治美術会の人脈に限られていた。また、福地たちの日本図案会が常盤木倶楽部などを会場とした毎回数十名程度の集まりであったのに対して、平山らの大日本図案協会は創立翌年の明治三十五年には会員数三三

1　福地復一（『(第五回内国勧業博覧会)審査官列伝　前編』所収）



2　「徽古館設立主意書　徽古館建設案附図」（神苑会　明治26年）

3　神宮徽古館（現状）

五名に達していた。三十六年の第五回内国勧業博覧会では、美術工芸品図案部門の審査主任は平山で福地はそのもとにあった。この平山は塩田眞の実弟である。

福地の教え子になる明治三十二年図案科卒業の河邊正夫は七月の生徒成績品展覧会に「倶楽部建築」で一等賞を授与され、受賞者総代を務めた。河邊は三十四～三十七年まで美術学校助教授を務めたが、このとき明治以降の戦死者を顕彰するために第二師団駐屯地となった仙台青葉城西本丸址に昭徳碑を建てることとなり、美術学校にその製作が委嘱された。設計を河辺が、金鵄を沼田一雅が担当し、後者の鋳造を助教授桜岡三四郎が、据付を助教授安田辰三郎が担当した。像は三十四年春着手し、三十五年六月に完成し、碑は三十四年六月起工し、翌年十一月竣工した。同時に昭忠祭殿と戚陽舘が創設された。花崗岩製で高さ二十四メートルという碑は土盛切石積の基礎にめぐらした鉄鎖が鉄パイプに変えられているほかは当初の通り今も峻立しているが〔図4〕、さすがにこの規模では金属供出は免れたものらしい。幅二丈二尺、高さ一丈一尺の金鵄はすっかり青銅色になっているが、その躍動感と力感あふれる容姿は見るものをなお圧倒する。この種の記念碑としては異例の規模と礎台の様式的な完成度において出色の存在のように思われる。上部にバットルメントをつけた城郭風のゴシック様式で、小松宮彰仁の揮毫銘板「昭徳」はアーチ窓にデザインされている。日本ではカペレッティが遊就舘（明治十四年）で初めて実現した連想効果をねらったものだろう。昭徳とは聴きなれない言葉だが、この時期にはよく使われたようで、我が松戸にも重野安繹撰文、大山巌揮毫になる立派な昭徳碑があるくらいだ。新潟でもまた東京美術学校に意匠を委託して、明治四十年四月に白山公園（明治六年開設という日本ではごく初期の公園）へ昭徳碑を建立した。こちらは島田佳矣図案、岡崎雪聲鋳造で実施された。九尺の石造台座上に地球の上に立つ六尺一寸の神武天皇像がつくられ、その差し上げた右手に金鵄が羽ばたいている。こちらもやはり現存している〔図5〕。島田は中継ぎの塩田眞のあと、明治三十五年四月に東京工業学校助教授から美術学校図案科教授に転任し、昭和七年までの長きにわたってその地位にあった人物である。彼は明治二十七年に絵画科を卒業し下村観山と同期で、在学中は岡倉に存分に影響を受けた学年だった。建設費は新潟が四千八百五十四円に対し、仙台は二万千二百円で、四倍強となっておりその規模が知れるというものだ。仙台の昭徳碑の施工には、宮城県技師杉野茂吉と山添喜三郎があたった。山添は明治六年のウィーン万博に大工として派遣され、かの地で建てた本格的な神社建築と和風庭園の日本パヴィリオン建設にあたり、大評判をとりジャポニスム興隆に大いに貢献した。かつて、山添らが無から始め手探りで学んだ西洋建築がわずか三十年後に日本人設計者の手によってその手法とスタイルが咀嚼される様を何と感じたろうか。

桜岡は岡倉とともに辞職した十七名のうちの一名であったが、洋風鋳造の専門家として三十三年助教授に復職し多くの委嘱製作に従事し、三十六～九年に文部省から工芸科として初めて欧米に留学を命じられた。河辺も三十七～四〇年に農商務省海外実業練習生としてニューヨークに留学した。練習生としての横山大観、六角注太良（紫水）と同年同月出発であったが、後者は岡倉のボストン行きに従っての洋行であった。沼田もまた三十六～三十九年に練習生としてセーブルに留学しているのは奇妙な符合である。この制度は本来は産業技術伝習のための奨学制度であったが、高村光太郎や白滝幾之助、寺崎武男、武石弘三郎、畑正吉など多くの美術学校卒業生が利用している。需要はデザインを美術から分立し始め、多くの人材が求められていたし、新しい領域は若い作家を惹きつけ始めていたのだ。領域の成長は徐々に世代の交替を推し進める結果になった。

明治四十年は東京府が主催する最初の博覧会となった東京勧業博覧会と文部省主催による第一回美術展覧会とがともに開催された年であった。前者は三月二十日に開幕し、その出品分類の美術部門は「東洋画、西洋画、彫塑・塑像・鎚起造・鋳造・彫刻・篆刻」とされ、図案は別部門として独立して「建築図案、美術及工業図案、広告・表紙・レッテル・絵葉書等ノ

図案」と設定された。ここには日清日露戦後の日本の産業発展と対外的自負心が如実に反映されていた。西洋画では中村不折「建国剏業」や青木繁「わだつみいろこの宮」が評判を呼び、図案では橋口清（五葉）、国井喜太郎（後、工芸指導所長）ら若い作家も受賞した。文部省の美術展覧会にも図案部門の採用が取りざたされた、六月十二日、福地復一と井手馬太郎は文部省の福原専門学務局長に面会し、「図案も亦、出品の一科とせられんことを述べし」ことが報じられた。しかし、十月二十五日に始まってみると「日本画、西洋画、彫刻」の三部門となっていた。西洋画との対抗概念となりおおせた日本画部門の審査員は岡倉、下村観山、横山大観であった。他方、福地はこの年、胃癌が見つかり、翌年七月二十二日芝高輪自宅で死去した。四十九歳であったと言う。彼こそ非命の生涯というべきだろう。

《つけたり》本稿を提出した後で、河邊正夫について私家本が出ていることを岡山県美の妹尾さんに教えられた。それは河邊正男・弘・彰男・玄共編『河邊家のこと』（平成十一年）であり、今に至る同家の歴史が綿密に語られている。同書によると、正夫は池田家に仕える河邊家第十代当主として明治十四年岡山に生まれている。二十七年に東京美術学校日本画科に入った。河邊だけでなく島田も日本画科出身であったが、図案がまだ下図から左程離陸していない明治後半の段階では、日本画家の修練としての有職や模様の素養は大いに有効だったのだろう。

卒業後明治三十二年に東京工業学校助教授となり、一年後に美術学校に転じた。しかし、三十七年には農商務省実業練習生としてニューヨークに渡り、三十八年以降はデザイン事務所に勤め四十一年に独立しカワベ・スタジオを設立した。渡米した岡倉とも交友があったようだ。博覧会や建築装飾を数多く手がけた。〔図6〕また、四十三年には同郷の国吉康雄がカワベ・スタジオに寄食し、ナショナル・アカデミーに通ったという。四十五年に帰国してからも、帝国劇場喫茶室、島津邸洋館、慶応義塾大学図書館など建築室内装飾に腕を振るったが、大正七年四十三歳であっけなく病死してしまった。彼にとっても転機となった美校辞職もあるいは学校騒動の余波であったのかもしれず、時代と人とのめぐり合わせを考えさせられる生涯である。

4　昭德碑（『仙台市史』明治41年　口絵）

5　昭德碑（白山公園　澤田佳三氏提供）

6　河邊正夫設計「シカゴコングレスホテル　日本室」（1910年頃）

一寸

第十五号　二〇〇三年八月

第十五号目次

新・旧刊案内15　無題　青木　茂　1
明治挿絵譚　岩切信一郎　4
前回の補綴／『挿絵節用』の吟味／『佳人之奇遇』の挿絵
―高橋節雄・浅井忠―／鏑木清方の『新小説』表紙絵評
図画教育者列伝（六）　金子　一夫　7
松田霞城（その五）
利行拾遺（そのⅠ／そのⅡ）　丹尾　安典　10
玄々堂二代と松田龍山　銅・石版画遺聞13　森　登　19
附　松田龍山と水路寮の銅版海図
無名と非命　福地復一のこと　森　仁史　26
■古本歩き・大阪の巻■
昭和十二年の大原氏コレクション　山田　俊幸　30

新・旧刊案内15　無題

青木　茂

■先日のこと、山下裕二さんにどこかの会で挨拶したら常識人の私に「マニアックですね」という、よく聞けば『一寸』のことらしい。私たちは自分の眼と手で見て面白いと思ったことを書いているのであるから美術史の大道を往来している、と自負している。マニアックではない。

■今回は同人大谷さんが八ページ分を埋めるという（少しマニアックか）ので、私のように羊頭を掲げて狗肉を売ると皮肉られる舞文は短かくすることとする。

■最近、美術史の専誌に「漫画」についての大論文が載っていた。論者は国書基本データベースから近世と近代の「漫画」と名のつく図書を拾ってそれが「漫画」だと思っているらしい。近世の漫画といえば誰でもが天才漫画家耳鳥斎を思うのであるが、残念なことに十種はある耳鳥斎の漫画本には「漫画」という書名がつけられていない。耳鳥斎（ばかりではない）を除いて、当然のこと耳鳥斎の『歳時滅法戒』に寄せた風来山人の序文も読まずに漫画を言うのはそれ自体どだい漫画というものである。説明しないで近代を明治時代だけとするのも漫画だが、明治にも「漫画」と書名にない漫画本はたくさんある。渡辺幽香の『大日本風俗漫画』を挙げて同じような（どれもけっして漫画ではない）『日本かがみ』、や「漫」の字のつく『寸陰漫稿』を挙げないのは、それ自体どだいご自分が漫画である。ひょっとして漫画の見本を見せようというのであろうか。これに比べれば『一寸』の誰もがちょっとは良い。

■私はずいぶん以前のことだが、若い人の精一杯の仕事についていちゃもんをつけ、今に至ってあと味が悪い思いをしている。モノを見ないでコン